

インドと中国の食料消費構造の比較

常務取締役 内田多喜生

1 中国とインドの人口逆転

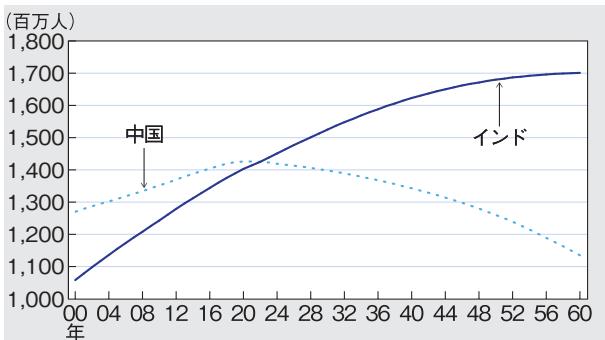
国連によれば、インドの人口は2023年には中国を上回り、世界一になった。23年7月1日時点の数字をみると、インド14億3,800万人、中国14億2,300万人となっている。そして、国連の予測ではインド人口は2060年代まで増加が続き、約17億人でピークを付けるとされる。一方、中国は22年に1961年以来61年振りに人口が減少に転じた。さらに今後減少が加速し60年には約11億人になるとみられている。60年の両国人口の差は約6億人にまで拡大する(第1図)。

このように人口動態からみると、世界の食料需給においてインドの存在感が中国に代わって、今後非常に大きくなっていくことは確実とみられる。そこで、インドの食料消費構造について、中国との比較等を交えながら確認し、将来の世界の食料需給に与える影響について考えてみたい。

2 インドと中国の食料消費構造

まず、インドの食料消費の現状を中国と比較してみたい。第1表は22年のインド、中国の主要食料の一人当たり年間供給量を品目別に比較したものである。まず、穀物をみると、コメ・コメ製品に関してインドの年間99kgに対し、中国は134kg、小麦・小麦製品はインドの年間67kgに対し、中国72kgといずれもイ

第1図 インド・中国の人口推移



資料 国連世界人口推計（年央推計）

ンドが下回っているがそれほど大きな差はみられない。なお、インドは米、小麦、トウモロコシをほぼ100%自給しており、コメの大輸出国でもある。

しかし、食肉をみると非常に大きな差が存在する。インドは6.6kgと、中国の70kgの10分の1にすぎない。とくに、差が大きいのは豚肉で中国の40.2kgに対し、インドは0.2kgと200分の1である。牛肉に関しても、2.2kgと中国の8.0kgの3分の1以下にすぎない。逆にインドが中国を上回るのが、ミルクで81.8kgと中国の31.7kgの2.6倍である。

このように、インドと中国の食料消費構造を比較すると、とくにインドの食肉消費が圧倒的に少ないことが特徴である。その一方で、牛乳・乳製品消費はインドが中国を大きく上回っている。つまり、栄養面からみると、インドは畜産物からのタンパク質摂取を主に牛乳に依存していることが中国との大きな違いである。

3 経済成長と食肉消費

一般に経済成長は食肉需要(その飼育のための飼料需要も同時に)を高めていくとされる。第2図は、22年時点の国・地域別一人当たり食肉消費量(ここでは食肉供給量)と一人

第1表 インド・中国の食料消費構造(2022年)

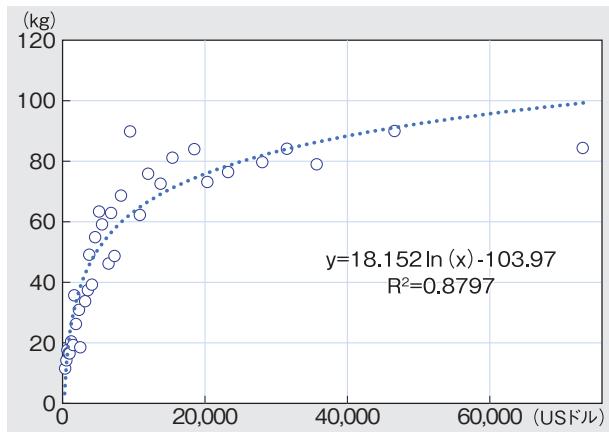
(年間一人当たりkg)

	インド①	中国②	倍①/②
穀物(ビール除く)	181	222	0.8
コメ・コメ製品	99	134	0.7
小麦・小麦製品	67	72	0.9
野菜	94	408	0.2
果物	65	112	0.6
食肉	6.6	70.0	0.1
牛	2.2	8.0	0.3
家禽	3.5	17.1	0.2
豚	0.2	40.2	0.0
ミルク(バター除く)	81.8	31.7	2.6
卵	4.7	21.8	0.2
魚介類	8.9	41.6	0.2

資料 FAOSTAT

(注) 数字はFood supply quantity (kg/capita/yr)。

第2図 一人当たり食肉供給量と一人当たりGDPの関係(2022年)



資料 FAOSTAT

(注) GDPの小さい順から35階層(最大4.9万ドル以上)に区分し平均値算出。

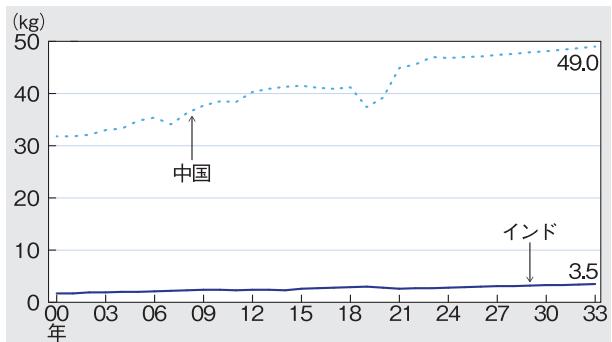
当たりGDPの関係をみたものである(一人当たりGDPで35区分にグループ化)。

同図にみられるように、一人当たり食肉消費量は一人当たりGDPが1万ドル程度まで急速に増加し、2万ドル程度で横ばいになる関係がみられている。ここで、22年インドのGDPは2,445USドル、中国は12,598USドルである。一見すると今後インドの経済成長の余地は大きく、それに伴い食肉消費量も増加していくことが想定される。そのためインドが世界の食料需給に与える影響については、経済成長による食肉消費の大幅増加(=飼料穀物消費の大幅増加)が本当にみられるかどうかが論点になろう。そこで、実際に国際機関の予測をみるとインドの食料消費構造は中国に比べ固定的で、中国のように経済成長に伴って食肉消費が大幅に増えるとはみていいくことがある。第3図は、OECD-FAO「Agricultural Outlook 2024-2033」より、00年から33年までのインドと中国の食肉消費の推移と予測を示したものである。

00年と比較し33年時点のインドの食肉消費量は1.8kg増にとどまる。これは同期間の中国の17.3kg増の約10分の1である。33年の食肉消費量も、中国の49kgに対しインドは3.5kgと大きく下回る。

周知のとおり、この背景にはインドの社会的・文化的特徴があるとみられる。ブラウン、レスター・R. (1995)は「所得の増加とともに

第3図 一人当たり年間食肉消費量の推移と予測



資料 OECD「OECD-FAO Agricultural Outlook 2024-2033」

(注) 数字はHuman consumption, Retail weight。牛、豚、鶏、羊合計。

食事のパターンを変えるのは、すべての社会に共通」するが、例外としてヒンズー教国における牛肉、イスラム教国における豚肉をあげる。インドの人口の8割がヒンズー教徒、1割強がイスラム教徒である。そのため、インドは過去に途上国でみられたような所得水準と食料消費の関係にあてはまらないという見方もある。少なくとも、今後10年程度のスパンでインドが世界の食料需給に与える影響は、過去数十年中国が世界の食料需給に与えた影響よりは小さくなるとみられる。

なお、東南アジア・サブサハラ諸国中心にインド以外にも高い経済成長と大幅な人口増加が見込まれる国々がある。加えて地政学リスクや気象変動リスクなど、世界の食料需給に影響をもたらすリスクは多方面にわたることに留意していく必要があろう。

<参考文献>

- ・草野拓司(2022)「第5章 インド」『農林水産政策研究所 [主要国農業政策・貿易政策] プロジェクト研究資料第10号』
- ・須田敏彦(2006)「第2章 食料需給の構造と課題」、内川秀二編『躍動するインド経済—光と陰—』アジア経済研究所・JETRO
- ・藤田幸一(2006)「インドの食料問題と食料政策—その構造と展望—」『国際開発研究』第15巻2号
- ・ブラウン、レスター・R. (1995)「だれが中国を養うのか?」(今村奈良臣訳)ダイヤモンド社

(うちだ たきお)